

五 有用の生涯、有効の生活

さて人の一生、之を有用に使へば、随分役に立つ仕事も出来るが、無駄にすれば、随分やくざなものにもなります。古いく昔々、神様が、生物の壽命を定めるといふので、大勢の動物を集められた。すると第一番に馬が出た。「三十年としてやらう」と仰有れば、馬は「イエもう一生涯追使はれることの苦しさ、自分の役にも立たぬことに、三十年も使はれては堪りませぬ」と言譯して、十八年にして貰った。第二に犬が出た。之も三十年と仰有る壽命をば「主人のために働いても、いつも虐待されて、一日でも樂に寝ることさへ出来ぬ」と御斷り申上げて、十二年に負けて貰った。第三に出た猿は、之も矢張り三十年の壽命は、たゞ人に馬鹿にされて、腐つた果物など與へられ、苦しければ苦しがる程、人は手を叩いて喜ぶ。到底そんなに長い苦には堪へられぬと、平身低頭一生懸命にお願いして、やつと壽命をば十年に定めて頂いた。最後に出たのが人間と云ふ奴、之も多分三十年は長過ぎるとお詫すると思ひの外、「三十年では短か過ぎて、何も出来ませぬ」と、強てお願いして、三十年の上に、慾張にも、馬の年の十八年と、犬の年の十二年と、猿の年の十年とを増して頂いて、漸く七十年にして貰ったが、儲さうなつてみると、初の三十年は有耶無耶に過して、次の十八年は、世間の義理やら人の世話やらで、丁度馬の一生と同じ事に暮して了ひ、いつしか四十八年たつた。次の十二年は、孫子の世話やら家のためと働いても、誰も褒めてはくれず、矢張り犬の一生で済んでしまふ。最早六十歳にもなつた。所で次の十年は、猿の年を貰っただけあつて、老耄したと云うては笑はれ、時勢を知らぬとは馬鹿にされ、怒れば怒る程、悲しめば悲しむ程、弄物にされて、どうやらかうやら一生を済まして仕舞ふとは。古い印度物語の筋書。

孔子聖人ですら、「十有五にして學に志し、三十にして立つ」と申される。之を皮肉つたものか、「孔子さん二十九までは跛かな」と云ふ川柳がある。然るに今日では、十有五歳ではなく、七歳にして學に志しながら、三十にしても尙且つ、獨り立ちのならぬ有様ではありますまいか。實際今の世、大凡三十年位までは學窓に過して、世事に疎く、たとひ實生活に入るとも、黄雀の徒として、有耶無耶に過して了ふ。それから已後は、名に迷ひ利に狂ひ、富貴若し天の上にあるならば、梯子をかけて取らんとぞ思ふ

といった有様に、馬犬猿の眞似事位で、人間一生のケリをつけ、死の墓場に送られて、土饅頭の餡になるか、石のシャツポを被るが關の山。「人の身は背戸の畑の雪達磨、消えての後は其の名ばかりぞ」其の名ばかりも程なく消えて了ふ。

眞面目に考へたら、人生の問題は餘程變なもの。孔子聖人も「四十にして惑はず、五十にして天命を知り、六十にして耳順ふ。七十にして心の欲する所に從へども、矩を踰えず」とさへ申されてある。それに、いつもかも如來慈光の下に、無限の恩寵に満足して日送いたす人々は、其の中にまた格別の光風がある。思へば「不思議といふは、斯様に長命さして頂いたことである」との古徳の述懐。誠に有難く味はれます。